

# 『今とりかへばや』の〈家〉への志向

——親子間の〈愛情〉描写から——

伊 達 舞

## 一 はじめに

『今とりかへばや』は平安時代末期にリメイクされて誕生した物語作品である。この時期は公家中心の社会から武家中心の社会への移行期に当たり、院政という新たな政治体制の中で、保元の乱、平治の乱などの大規模な武力による権力闘争も絶えなかった。だが、政治的には不安定な一方で、『堤中納言物語』の中の「虫めづる姫君」の他、当時既に古典となっていた『源氏物語』初の注釈書『源氏釈』、また多くの和歌集や歌学書などが成立しており、当時絶大な権力を誇っていた平家園の文化サロンが最も活性化していた時期とも言えよう。『今とりかへばや』はおそらくこうした背景から、改作に至るモチベーションとそれ物語化する環境の双方を得て成立したものと考ええる。

さて、明治時代には倒錯的・退廃的物語と捉えられ文学的に軽視されがちであった『今とりかへばや』だが、昭和に入り、鈴木弘道氏が〈愛情の種々相〉という視点から、特に親子間・肉親間の親密な〈愛情〉が描かれたことを評価すべきと提唱されて以来今日までこれが通説となっている。だが、この親子の〈愛情〉の描写に深く

注意して作品を見直すと、何組もの親子の間に多くの〈愛情〉があることが描かれていながら、また、その親子すべてが〈愛情〉を発端とする問題を抱えており、最終的には、問題は解消されるものの親子が離れ離れになってしまっていることに気付く。もし『今とりかへばや』執筆の意図が〈愛情の種々相〉を描くことにあったのであれば、せっかく数多く登場させた親子をこうも一様に断ち切ることはなかったのではないだろうか。

そこで本稿では、『今とりかへばや』が既存の物語『とりかへばや』のリメイク作品であった点に留意つつ、この親子間の〈愛情〉のあり方とそこに含まれる問題、迎えた結果に着目し、その改作のモチベーションないし物語の志向するところを読み解いていきたい。なお、以降『今とりかへばや』本文を引用するにあたっては特に断りのない限り新編日本古典文学全集39『住吉物語・とりかへばや物語』（小学館 2005）を使用し、□内にその巻数とページ数を付す。

## 二 『今とりかへばや』に描かれる親子の〈愛情〉

はじめに、今述べた『今とりかへばや』に登場する親子の間の〈愛情〉の特徴について、その親子毎に例を挙げながらみていきたい。

ここで便宜上、主要登場人物とその親子を次のように整理しておく。

便宜上の名称		父	母	子
左大臣家	左大臣	藤中納言女 源宰相女	女君（女中納言・女大将） 男君（男内侍）	
右大臣家	右大臣	北の方	四の君	
吉野の宮家	吉野の宮		吉野の姉君・吉野の中の君	
朱雀院家	朱雀院		女東宮	

まず【吉野の宮家】であるが、父・吉野の宮は、俗世を捨てた出家者でありながらも、二人の姫君たちへの（愛情）が絆となり仏道修行に専念出来ずにいた。そのため、女中納言の突然の来訪を、姫たちに良き後見をつけて都へ送り出す絶好の機会と考えて積極的を受け入れ、女中納言と吉野の姫君たちの仲を取り持つ様子が明記されている。そして、無事女君との「とりかへ」を果たし今大将となった男君の迎えにより、いよいよ姫君たちが都に上る日には、

宮はいとうれしく、かひあるさまと見送りきこえたまふ。名残なくかい澄む心地して、心細く思さるれど、一筋におこなひ勤めさせたまひければ、いみじくうれしく、年ごろ思しつる本意かなひ果てぬる心地せさせたまふ。（巻四 頁四六四）

と、晴れ晴れとした心地で彼女らを送り出している。しかし一方、姫君たちは吉野の父宮のもとを離れることを、「いと口惜しく、なほ世に似ずうひうひしき有様にて、都に出でても人笑はれに憂きことのみこそあらめ」（巻四 頁四六一）と不安に思っている。更に、

父宮は自らの今後については「鳥の音聞えぬ山に跡絶えはべりなん」（同）と考えているが、姫君たちは「ここをこそ頼みてつひの住処とも思ふを、年ごろに変はらず住み荒さでおはしまさんこそうれしからめ」（同）と、正反対のことを希望している。しかし、父宮はこのことに気付かぬまま娘たちと別れることになる。

次に【朱雀院家】について確認していきたい。父朱雀院は、まだ幼さが残り、かつ東宮という本来女性が就くべきでない地位にある女東宮のことを何かと氣にかけている。しかし、左大臣家男君が尚侍として出仕したことにより引き起こされた女東宮の妊娠・出産については、「もし気色も御覽せんにとつましければ、例なきことなれどいかがせん」「なかなかこのほどは御心地の苦しげなる折かくとも聞こえて」（巻四 頁四三六）という周囲の者の判断により、何一つ知らされないままである。女東宮が人知れず男児を産んだ後になって初めて、女東宮が病であると知らされた朱雀院は、「さばかりにものしたまひけるを今まで見たてまつざりけること」（巻四 頁四四〇）と慌てて手許へ引き取る。その後は「院はめづらしささへとり添へて、月ごろのおほつかなさにも、つとこの御方におはします」（巻四 頁四四三）と傍近く看病する朱雀院の姿が描かれる。娘への紛れもない（愛情）を感じ取ることができるものの、娘に起こった一連の事件・事実は最後までひた隠しにされ続けたことにより、彼の言動にはどこか的外れな感が否めない。

更に【右大臣家】では親から子への（愛情）が、直接子に悪影響を及ぼしているようにさえ思われる。父・右大臣は、多くの姉妹の中でも特に四の君を溺愛していた。その父の過度の（愛情）が、「母北の方」や「はらからの君」たちを四の君から遠ざけ、彼女は孤立

を余儀なくされているのである。そして、宰相中将の密通事件の折、本来なら四の君の味方になるはずの「はらからの君」の乳母が、「(右大臣が)この君をのみ限りなきものに思ひきこえたまひて、異御方にはことの外にのみ思ひ落としたまへるを、妬しいみじとのみ思ひつめ」(巻三 頁三三二)たことによって、この密通が夫である女大将の不興の理由であることを暴露してしまう。この結果父の《愛情》が一時的に勘気に変わり、普段この《愛情》だけを頼みにしていた四の君は、一人身重の身体を持て余すことにもなっており、やはり親の《愛情》が子の身に降りかかっていると見ることが出来る。

なお、四の君は宰相中将に助けられつつ第二子を出産したものの予後が思わしくなく、危篤状態に陥ってしまう。その様子を知った父右大臣は四の君を許し、彼女は一旦右大臣邸に戻るが、その後、「とりかへ」を果たした(左大臣家の右大将)と復縁し、彼の元へ身を寄せる。

最後に【左大臣家】についてであるが、左大臣家最大の問題はなんとと言っても兄妹の「とりかへ」であろう。作品中、これは「昔の世よりさるべき違ひ目のありし報い」による「天狗の業」(巻三 頁三七七)と説明されているが、入れ替わりが実際にどのような形で生じたのかをみていくと、「男っぽい女」「女っぽい男」という当人たちの幼少時の性格もさりながら、それ以上に、周囲の姿勢や判断が「とりかへ」を決定的なものにしていることがわかる。そもそも「とりかへ」の発端は、幼い女君が人前に姿を現して笛や漢詩の才能を披露する一方で、何事をも「恥ずかし」と思う男君は人前に姿をあらわすことがなかったため、周囲の人々が男女取り違えて認

識してしまったことにある。とは言え、この時の「とりかへ」はまだ家の中のみで行われており、私的な場のうちに留まっていた。だが左大臣家では、それぞれがなまじ優れていたために、元服・裳着という性別を公的に確定する儀式まで「とりかへ」られたまま行われてしまった。更に、女君は出仕・結婚し、男君も尚侍として出仕するようになったことで、「とりかへ」はいよいよ後に引けない、決定的なものとなったのである。この「とりかへ」が確立するまで、当事者である兄妹の心中については触れられることはなく、最終的な決断は全て父である左大臣がしているのだが、その時の左大臣の姿勢に注目したい。

まず女君の出仕に関して、当初左大臣は帝から女君を童殿上させるよう要請を受けても、「いとど胸つぶれ、あさましくかたはらいなければ」(巻一 頁一七五)それを承諾することはなかった。しかし再三の要請に、次第と、

さりとして、たださらばあるにまかせてあるばかり、これも前の世のことならめば、かかる筋にてもおのおのさてもものしたまふべき契りこそは(同)

と思うようになり、女君の元服と男君の裳着を執行してしまう。更に女君の四の君との結婚、男君の参内の段階になると、それぞれ、

をかしと思しなげら、なにかは、いかに言ひてかあるまじきこととはものせん(巻一 頁一八三)

中納言の有様を見ればこれもかうざまにてよかるべきにもやあらん、仰せ言違へず、げに後の位に定まりたまふやうもありなん、思ひの外にめでたきことにてこそはあらめ（巻一 頁一九四）

と考えて決定しており、「あらまほし」ことにも胸騒ぎたまふ」（巻一 頁一九四）姿は、なんとも危機感に欠いている。このような左大臣の樂觀的な態度は優れた我が子への〈愛情〉と過信ゆえであり、そこに悪意は全く見られない。しかしながら女中納言は出仕早々、自らの普通ではない状況を「あないみじ、ひたおもてにて身をあらぬさまに交じらひ歩くは現のことにはあらずかし」（巻一 頁一八八）と否定的に捉えており、後に直面することになる数々の問題も、結果的にはこうした父左大臣の態度が原因となったともいえるよう。

こうして「とりかへ」られたままとなってしまった男君・女君であるが、最終的には男君は右大将へ、女君は尚侍へと二人の「とりかへ」が成立し、男君は新たに建てた二条殿に、また女君も帝の妻として宮中に住まうようになっており、左大臣邸には残らない。

このように見ると、『今とりかへばや』に描かれる親子の〈愛情〉はどの親子の間にも共通して、子の望みに反する形をとっていたり、子の窮地をなら理解しないものであったり、逆に子を窮地へ追いやる火種となっているなど、そこに何らのひずみが生じている傾向が見られた。そして物語終了時には、『朱雀院と女東宮』を除いた全ての親子が、子が親元を去っていく形で離れ離れになっているということもわかった。

ところで、『今とりかへばや』に見られるこのような親子間の〈愛情〉の特徴は、この物語に特殊なものなのであるうか。それを知るため、ここで一旦、『今とりかへばや』以外の物語に描かれる親子の〈愛情〉描写に目を向け、『今とりかへばや』のそれとの比較を試みたい。

### 三 他作品に見られる親子の〈愛情〉

『今とりかへばや』成立前後の物語のうち、親から子への〈愛情〉により富んだものとして真っ先に思いつく作品は『狭衣物語』ではないだろうか。『狭衣物語』と『今とりかへばや』の狭衣と女中納言は、いずれも容姿をはじめ漢詩・和歌・笛などあらゆる方面に秀でたスーパースターという点で共通している。またこれは、『とりかへばや物語』からの影響を指摘されて久しい『有明の別れ』の男装の姫君も同様である。しかし、こうした優れた才能を持つ子に對しての親の反応は、この三作品のうち、『今とりかへばや』のみ異なっている。

『狭衣物語』『有明の別れ』では、両親は優れた我が子に對して、しばしば「ゆゆし」の語を用い、現世に永くは留まらず早死にしようのではないかと不吉がる。例えば、狭衣が帝をはじめとする大勢の前で笛を吹くと、次々と奇瑞が顕れ、ついには天人が天稚御子という少年の姿で降臨し彼を連れ去りそうになる。この事件を耳にした狭衣の父は、

殿は、されど内裏に参らせたまひて、ありつらんことを聞き、居たまひつらん跡をいま一度見てこそは、身をもいかにもな

さめと、さかしう思して、御装束などしてまふも、はかばかしうも立たれたまはず、倒れつつ出で立ちたまふさま、いといみじ

と描かれ、母宮も、「ただ御衣をかひ被きて臥したまひぬるまゝに、息をだにしたまはず」という状態になる。一方、『有明の別れ』の男装の姫君も、左大臣邸で催された臨時客の宴の折に横笛を吹くと、「限りなく晴れたりつる空俄かに曇り、稲妻いたくして、いひ知らぬ香ばしき香吹き出で」という奇瑞が生じ、これを見た父は「大臣もの覚え給はず、立ちて御笛を取り隠し給ひつ」と、我が子を守るために笛を隠してしまう。また、笙の笛を吹いて「星の光に輝き、月の光まさりて、空の光近づく心地す。香ばしき風、大殿の上に満ちて、白き雲棚引きわたる」という奇瑞を起こすと、これを知った父はやはり無事を確かめんと我が子の元に駆けつけ、母親は家で心配のあまりに胸を潰しかける。

これらの笛にまつわるエピソードは『今とるかへばや』にも存在している。女中納言の笛の腕前も、「雲居を分け響きのほり」「そぞろ寒くおもしろき」など、『狭衣』『有明』と共通する表現で描かれているが、そこに「ゆゆしさ」の影は一切見られない。父左大臣はこれを、彼女が子供の頃は「こんなに優れているのにどうして女なのだろう」という方向に悩むのみであり、更に、女中納言として満座の中で吹き澄ました「笛」に対しては、左大臣の反応自体描かれていない。ただし、この直前に女中納言の漢詩の才について「大方は誰かは知る人のありける、かくても、げにいとようありぬべきことにこそありけれ」と述べていることから、おそらく彼女の笛の才

についても、これと同様のスタンスであつたろうと推測できる。『今とるかへばや』の父左大臣は我が子の才能に全くもって憂慮を感じてはおらず、むしろその才能が遺憾なく発揮されることで、「とりかへ」が上手くいっていることを確認し、安堵しているのである。

また、多くの親子が登場し、その間のやりとりが詳細である作品としては『浜松中納言物語』が挙げられるが、こちらは『今とるかへばや』とは反対に、切っても切れぬ強い絆や、堅く結束して共に窮地を乗り越えていく様子、互いの状況や意志を理解した上での相手を慮って行動などが強調されている。

例えば主人公の中納言は、亡くなった父宮が子を想う心のあまり唐の三の皇子として転生したと知ると、父を訪ねて遠く唐に渡っている。一方父宮の方でも、突然訪ねてきた中納言を一目見て息子だとわかり、二人は漢詩を交換し合い互いに涙を流すなど、親子間の絆の深さが強調されている。父宮は「つねに見まほしく、あはれにおほえ」る我が子中納言を身近に置いて唐滞在中の処世などを指南しているが、これも一方的な指図ではなく、中納言の意に沿うものとして描かれている。

今挙げた他にも、娘の恋の成就を画策する父や、娘のためにどんな形であれ身分高き夫を持たせようとする父、娘がなかなか通って来ない身分高き相手を想っていると知りながら、身分よりも誠意ある相手を持つことこそ娘の幸福と考え、あえて堅実な結婚の手筈を整える母など、双方向的な親子の関係が圧倒的に目立っている。

このように『浜松中納言物語』に見られる親子の深い絆は、この作品が親子の絆をもっとも断ち切りがたい執着と考える仏教観に基づく輪廻転生譚としての性質を有することに由来するのであるが、

それだけにこれもまた『今とりかへばや』に描かれる親子間の（愛情）とは全く異なるタイプであることがわかる。

それでは一体、『今とりかへばや』に描かれた親子の（愛情）とは何を表しているのだろうか。

#### 四 『今とりかへばや』に描かれた親子の（愛情）と

##### （家）の繁栄

第一章にて、物語の終わりでは離れ離れになってしまうことを指摘した『朱雀院と女東宮』以外の親子だが、その別れには、男君が初めて建てた自らの屋敷・二条殿が深く関わっていると考えられる。

吉野の姫君たちは、無事「とりかへ」を果たし右大将となった左大臣家男君によって引き取られると、姉君は男君の妻として、中の君は男君を後見として新築の二条殿に住まいはじめる。また、男君の計らいによって中の君と結婚した宰相中将も多くを二条殿で過ごしているようであり、勘当を解かれ父右大臣のもとで暮らしていた四の君も、しばらく後には、吉野の姉君より格付けは下ながらも男君の妻として二条殿に住まうことになっている。更には尚侍となつて帝に見染められた女君の里下がりも、この二条殿であった。この女君の里下がりには些か注意を必要とするだろう。

通常、貴族の姫君の後見役は特別な事情がない限り父親がするものである。女君の父は現役の大左大臣であり、女君失踪中に倒れていたとはいえ、後見に立てない理由は何もない。また女君の認識についても、初めて帝と契りを結んだ後の場面では、

などて宮の出でたまひしにもろとも出でずなりけん。殿も、つ

私たちのほどなどはさてさぶらふべく、女房などもさうざすしかるべきことに思ひたりしを、何かは、臨時の祭までとはさても、それを過ぎてこそは殿（筆者注・左大臣邸）へもまかめなど、うち思ひける心もあさましう思ひ続けられて（巻四 頁四五）

とあり、この箇所から、少なくとも女東宮の退出後間もない頃までは彼女は左大臣邸に帰るつもりであったことがわかる。

だがその後、彼女が出産のための里下がりですぐに父左大臣邸ではなく、兄である右大将の二条殿であった。女君が帝と初めて契りを結んだのが「年もたちかはり」すなわち年明けの一月中、二条殿が完成し男君が吉野の姫君たちを迎えに行くのが「三月十日ごろ」のこととあるから、帝と契りを結ぶ以前の女君が左大臣邸に帰るつもりでいたことは当然である。しかし、二条殿が完成したからといって左大臣邸がなくなるわけではない。彼女はこの時点ではまだ尚侍であったとはいえ、帝の世継ぎとなる男皇子の出産を大いに期待されており、当然、里下がり先にもそれなりの準備や配慮が必要とされただろう。その点、新築の二条殿には「堀川面には内侍の督の殿のまかでたまはん料」（巻四 頁四六五）が準備されていることが示されていることから、読み手は自然と二条殿を里下がり先として認識してしまいがちなのであるが、よく注意して読めば、ここで左大臣邸と二条殿、父と兄の立場がさりげなく入れ替えられていることに気付く。この差し替えに全く不自然さを感じられない理由の一つとして、この前後から、それまで頻繁であった左大臣の登場そのものがこの前後から格段に少なくなり、物語から

フエードアウトしていつてしまうことがあげられるだろう。そして物語の最後、男君が関白へ昇進と対照的に左大臣の出家も語られ、はつきりと代替わりが示される。だが、この父左大臣と男君との力関係の入れ替わりは二条殿完成を境に行われはじめていたのである。因みに、一命をとり留めた後唯一父朱雀院のもとに残った女東宮（女院）も、男君が後見であることが明記されており、彼女はもと東宮であり女院であるため二条殿に住むことはないが、これもまた男君勢力圏の女性と考えて良いだろう。

このようにどの親子の離別にも必ず関わっている二条殿の主、左大臣家男君であるが、彼は物語当初、非常に恥ずかしがりで消極的な性格の持ち主として描かれていた。しかし女君が宇治に身を隠してしまふと自ら女姿を男姿に改め、女君失踪のショックのあまり床に伏せてしまった父左大臣の代わりに女君を探しだし、左大臣家の悲願であった兄妹の「とりかへ」まで漕ぎつける。また女君と入れ替わって右大将となった後も、失踪前乃ち女中納言・女大将に少しも劣ることなく、むしろ「かをりあてなるところ」「いとすくよかに、ものあざやかなところ」（巻三 頁四〇三）すら加えて、見事に人気者の右大将を宮中へ返り咲かせた。以降、大風呂敷を広げた物語は大団円に向け、この男君の采配と行動によって収束してゆく。

この変貌と活躍が却って都合主義的であるとも捉えられ、近年では、兄妹に関しての心情描写が平等ではなく女君に偏っていることや、ストーリーの進行に伴い男君の性格づけに明らかな破綻が見られることなどから、物語の主軸はあくまで女君にあり、彼女が男装時代を経て獲得した「心強さ」をもって中宮という女性最高の地

位へと登りつめてゆく〈女の一生〉の物語であるという説も定説化している。だが、左大臣家男君の心情描写の少なさや性格づけの破綻は、男君の作中での重要度を左右する物としてではなく、この時期の物語の限界と考えるのが妥当なのではないか。それよりもここでは、父左大臣が病床にある、つまり「父」という機能が働いていない最中に「子」が自ら行動を起こし、二条殿が完成して「子」が「父」のもとを離れたのと同時期から、「子」と「父」の社会における立場が逆転している、その構成にこそ注目すべきと考える。

『今とりかへばや』に描かれた親子は当初みな、親が子に〈愛情〉を注いでいながらもひずみが生じており、それぞれに問題を抱えていた。だがそうした状況は、女中納言と男尚侍の出現により、のつびきならない状況まで問題が膨れあがり、若しくは逆に問題の脱出口を得て、変化を必要とするようになってゆく。例えば、四の君と宰相中将の密通事件は、そもそも四の君の結婚相手の中納言が実は女君であったことが問題を複雑化させていたことは否定できない事実であるし、またこの密通によって四の君と母姉妹との不仲が表面化し、これまで彼女を溺愛していた父は一時的に娘を勘当してしまう、といった具合である。そこへきて、自ら異性装という問題をはね除け、父・左大臣の力の及ぶ範囲から独立を果たした男君が、各家の「子」らを次々に二条殿へ引き取っていく。これにより親子の交流は半ば強引に断ち切られることになるのだが、皮肉なことに、親の〈愛情〉から切り離された「子」らは順調に昇進を重ね、最終的に女君は中宮、男君は関白、宰相中将は内大臣となり、その他の女性たちもそれぞれの妻として大団円を迎える結果となっているのである。

そしてこの大団円と引き替えに切り離されることになったのは、物語当初から見られた親子だけではない。物語進行中で新たに誕生した親子間でもまた、決別の選択がなされている。その決別の子が、女東宮（女院）と男尚侍との間に生まれた若君と、女中納言と宰相中将との間に生まれた宇治の若君である。

女東宮の出産は、父朱雀院にも知らされないほどの厳重な秘密であった。それは、東宮というやんごたない立場にある女性の醜聞を隠蔽するためでもありながら、子どもの父親は誰かという追求、ひいては左大臣家兄妹「とりかへ」の秘密を隠し覆すためにも必要なことであった。当然、生まれた若君と女東宮との親子関係は公に出来ず、若君は吉野の姉君の養子として育てられる。そして『今とりかへばや』はそのことを、若君を女東宮のもとに童殿上させ、我が子に自らが実の母なのだと思わすことも出来ず、他人として接することしか出来ない女東宮（女院）の悲しみの場面を用意することで明確にしている。

また女君と宇治の若君との別れは、選択したものを取りこぼされたものとを更にはつきり表していると思われる。女君は「とりかへ」を実行するため、涙に濡れながらも実の子との別れを自ら選択したのであり、本文中にも「人やりならず」「見捨てつる」と明記されている。これで「とりかへ」を果たした女君が、我が子を振り返ることなく女姿を謳歌しているとなると話はまた違ってくるが、やはり女君も我が子 pensando 胸を痛め続けており、親子の名乗りを上げられぬままの再会の場面も用意されている。女東宮（女院）のケースと異なっているのは、中宮となった女君が実は自分の母であることを宇治の若君がそれとなく感じている点である。だが若君は結

局それを誰に告げることもなかった。これによって親側と子側の双方から、社会的な親子関係の決別が成立したと見られるのではないだろうか。

## 五 むすびにかえて

このように、『今とりかへばや』は多くの親子間の〈愛情〉を細やかに描いていく一方で、親子が離ればなれになる結末を用意した。この〈愛情〉のある親子の別離が、物語の中に組み込まれた重要な主題の一つだったのではないだろうか。

〈愛情〉によって親子が繋がっていた当初、それぞれを〈家〉として見た場合にはけっして順風満帆とはいえず、寧ろ何かしらの不具合が目立っていた。〈愛情〉という個人的な感情を優先した秩序ではもはや破綻しかけていたのである。物語はまずそうした状況を描いた上で、一旦〈愛情〉ある親子を切り離し、左大臣家男君の二条殿を中心とする〈愛情〉に依らない新たな秩序、大団円という社会的な成功へと筆を進めていく。その結果、それぞれの〈家〉で男児・女児共に恵まれ今後の繁栄は疑いようもない一方で、二条城で生まれた子とその親の〈愛情〉の物語は存在せずに実にドライであるのも、物語中の価値基準が個人の〈愛情〉から〈家〉としての繁栄へ移行しているためであろう。この移行の間に、左大臣家女君と宇治の若君の対面のエピソードなどが差し挟まれ、別れに痛みを伴ったことを強調されていることで、秩序の移行はより一層浮き彫りにされている。

そう考えて物語を見直すと、〈個人〉を犠牲にする傾向は親子間にまつわる出来事に留まらない。

例えば女東宮は、未婚のままの出産という一大事に際して、頼み

の夫・男尚侍が姿を消し、その後姿を現したときには全くの別人である女君と入れ替わっていたことに「たとしへなく心憂きさまを見たまへ捨ててけるよと、人の御つらさも身の心憂く恥づかしさもつくづくと思し知られて、涙のみこぼれて御答へものたまはせぬ」(巻四 頁四二八)と酷く嘆き悲しんでいる。「とりかへ」の結果、皇位継承者たる男皇子が生まれ、東宮という本来女がつくべきでない立場から、願ひ通り退くことは出来たものの、それが女東宮個人の幸福だったかという大いに疑問が残る。

また中宮となって女の栄華を極めた女君にしても、女東宮と同様、けつして彼女個人の幸福が追求されてはいるとは言えない。「とりかへ」を果たすために身を切られる思いで宇治の若君を捨てた女君だが、身分の獲得や社会的成功の裏で彼女は絶えず涙を流している。その様子は、次に挙げる里下がり中の場面に如実に表れているだろう。

この御里居のほども、中納言(筆者注・宰相中将)はつとさぶらひたまひて、女房などものの言ひうち乱れなどして歩きたまふを、昔よりかたはなるまで馴れ遊びて、かたみに何ごとも隔てず言ひ合はせうち語らひての果て果ては、あさましう世づかぬ身の有様をさへ残りなく見えにし契りも、あはれならぬにもあらぬに、まして若君の何心なかりし御笑み顔思し出づるには、この人の声けはひを聞きたまふたびには、あさからずあはれにて、御涙のこぼるる折々もあるを、見咎むる人もあらばあやしともこそ思へと、押し拭ひみぎらはしたまふ(巻四 頁

#### 四九八・四九九

宰相中将は女君と強引に契りを結んだ末に、中納言が実は男装の姫君であったことを突き止めた張本人である。その結果、女君は彼の子を懐妊し、男装を続けられずに身を隠さなくてはならなくなったのであり、彼女にとっては「憎き人」であるのだが、その一方で、幼き頃から親しんだ友でもあった。また、彼女は女中納言時代、自分の姿が「世づかぬ身」であると人に暴かれることを何よりも恐れていた。その男装の秘密を、よりにもよって一番親しい宰相中将に知られてしまったことは、世間的な問題以前に、まず一人の人間として絶望的な気持ちになるに十分なことなのだ。しかし宰相中将は、男装の事実を知ってもなお彼女を愛し続け、宇治の別邸に隠して女姿に戻している。女姿に戻ること自体は彼女の心に反するものではなく、これら一連のことから、女君は宰相中将に対して「あはれならぬにもあらぬ」情を抱いているのだろう。更に、その間に愛らしき若君が生まれた縁を思えば一層あはれを感じるというのも頷ける。だが、帝の寵愛を受ける今、そうした思いを周囲に悟られてはならない。同じ二条殿にありながら知らぬ顔をし、必死に涙を「押し拭ひまぎらはしたまふ」姿は気の毒なほどである。

一方、帝に対して女君が愛情を示す表現はなく、また、男皇子を無事出産した折にすらも、周囲が喜びに沸く中、女君ひとりには宇治の若君出産のときのことを思い出し涙を流しており、肝心の若宮についての喜びには触れられていない。

そもそもこの女君と帝の結婚だが、実は『古とりかへばや』の時点では、女君は帝ではなく宰相中将の妻となっていたことが、『無

名草子』『風葉和歌集』『物語二百番歌合』に遺された史料をつなぎ合わせることによって明らかとなっている。つまり『今としかへばや』の作者はこの点を敢えて改訂したのであり、ここに、この物語が〈愛情〉すなわち〈個人〉の幸福よりも社会的身分を得ること、もつといえは〈家〉として成功することを優先して描かれたものだということがうかがえるのではないだろうか。

この物語は終盤に入り、『女君と宇治の若君』『女東宮とその若君』という、親子の名乗りを挙げられない二組の母子の対面が描かれた上で、最後、

さまざま思ふさまにめでたかりて御心ゆくなかにも、内の大臣は、年月過ぎかはり世の中の改まるにつけても、思ひ合はする方だなくてやみにし宇治の川波は、袖にかからぬ時の間なく、三位中将のおよすけたまふまに、人よりことなる御様、容貌、才のほどなど見たまふにつけては、いかばかりの心にてこれをかく知らず跡を絶ちてやみなんと思ひ離れけんと思ふに、憂くもつらくも恋しくも、一方ならずかなしとや〔巻四 頁五二一〕

という、今は内大臣となった宰相中将の嘆きで幕を閉じる。物語に一貫したテーマである「とりかへばや」が叶った結果、大団円を迎えてめでたし、めでたしで終わるのではなく、そのことによって生じた親子や夫婦の別れの嘆きを差し込んで物語を終わらせた意図はまさに、大団円という〈家〉の繁栄の裏に〈個人〉の抑制ないし犠牲があったことを強調することにあつたのだろう。

これまで『今としかへばや』は、『今としかへばや』成立以前の多くの物語がそうであつたのと同様に、親子や男女〈個人〉の〈愛情〉の物語として読まれてきた。故に、〈愛情の種々相〉や〈女君のサクセスストーリー〉を描いた作品として解釈されてきたのである。

しかしながら今回『今としかへばや』に描かれる親子の〈愛情〉描写に焦点を当てて考察を進めた結果、この物語には多くの〈愛情〉が描かれながらも、〈愛情〉の成就や〈個人〉の幸福は追求されておらず、寧ろ〈愛情〉によって繋がっている親子を切り離すことによって当初の問題の解消と、新たな成功―大団円を迎える構成となつてることが明らかとなつた。この新たな成功とは、社会的立場の向上や〈家〉としての繁栄であり、物語の始まりと終わりでは、個人的な〈愛情〉重視の規範から、より集合体的な〈家〉を重視する規範へと巧みにすり替えられているのである。『今としかへばや』の興味は正にこの、親子愛という〈個人〉を重視する規範からいかに脱却し、〈家〉という社会的集合体を重視する規範へとシフトするか、という点にこそあるのではないだろうか。

注(1) 鈴木弘道『平安末期物語の研究』初音書院 1960 第三篇第二章「とりかへばや物語に現れた愛情」に詳しくみえる。

(2) 引用にはそれぞれ、小町谷照彦・後藤祥子・新編日本古典文学全集29『狭衣物語』（小学館）、大槻脩『在明の別の研究』（桜楓社）を使用する。

(3) 西本寮子『とりかへばや物語』の主人公―女性としての成長を軸として―（『国文学攷』98号 1983.6）

# 参考文献

- 石壁敬子 新編日本古典文学全集39『住吉物語・とりかへばや物語』小学館 2002
- 池田利夫 新編日本古典文学全集27『浜松中納言物語』小学館 2001
- 小町谷照彦・後藤祥子 新編日本古典文学全集29『狭衣物語』(一)小学館 1999
- 小町谷照彦・後藤祥子 新編日本古典文学全集30『狭衣物語』(二)小学館 2001
- 久保木哲夫 新編日本古典文学全集40『松浦宮物語・無名草子』小学館 1999
- 大槻脩『在明の別の研究』桜楓社 1969
- 樋口芳麻呂 王朝物語秀歌集(上)『物語二百番歌合・風葉和歌集』岩波書店 1987
- 鈴木弘道『とりかへばや物語の研究』笠間書院 1973
- 鈴木弘道『校注とりかへばや物語』笠間書院 1976
- 桑原博史『とりかへばや物語全訳注』(一)～(四)講談社学術文庫 1978～1979
- 田中新一『新釈とりかへばや』風間書房 1988
- 市古貞次他『鎌倉時代物語集成』第四卷 笠間書院 1991

## 受贈雑誌(三)

- |                 |                   |
|-----------------|-------------------|
| クロノス            | 京都橋大学女性歴史文化研究所    |
| 芸文研究            | 慶應義塾大学芸文学会        |
| 言語表現研究          | 兵庫教育大学言語表現学会      |
| 神女大国文           | 神戸女子大学国文学会        |
| 高知大国文           | 高知大学人文学部国語学国文学研究室 |
| 稿本近代文学          | 筑波大学国語国文学会        |
| 語学文学            | 北海道教育大学語学文学会      |
| 國學院雜誌           | 國學院大學             |
| 國學院大學大学院文学研究科論集 | 國學院大學大学院文学研究科学生會  |
| 国語学研究           | 東北大学文学部国語学刊行会     |
| 国語教育論叢          | 島根大学教育学部国文学会      |
| 国語国文学           | 福井大学言語文化学会        |
| 国語国文学研究         | 熊本大学文学部国語国文学会     |
| 国語国文学報          | 愛知教育大学国語国文学研究室    |
| 國語國文研究          | 北海道大学国文学会         |
| 国語国文論集          | 安田女子大学日本文学科       |
| 国語と教育           | 大阪教育大学国語教育学会      |
| 国際日本文学研究集會會議録   | 国文学研究資料館          |
| 国文学             | 関西大学国文学会          |